

やる気発生装置

中学(3年)					高校(3年)	大学入試
高野	修学院	近衛	洛北	四条	北稜	共通テスト
1/21~	1/21~	1/22~	1/21~	1/22~	1/27~	1/17~
学年末テスト	第4回定期テスト	第4回定期テスト	第4回洛北確認テスト	総括テストV	学年末考査	
あと5日	あと5日	あと6日	あと5日	あと6日	あと11日	あと1日

受験生、そして日本人にとっての節目の日

受験生と、それに携わる人々にとって、この週末の2日間は特別な日となります。大学入試における共通テスト、そして近畿地区では明日が中学入試の事実上の統一実施日です。この2つの入試では、当日の得点がものを言う一発勝負の部分が特に大きいからです、受験生も関係者も、祈るような気持ちで当日を迎えます。今年の当塾では、ここでの試験をメインの一番とする受験生がいないため、いくぶん落ち着いておりますが、それでも塾の世界の緊張感が伝わってくる前日です。

とりわけ関西の人間にとっては、明日はもう1つ忘れることのできない記憶の日でもあります。1995年1月17日の早朝、のんびり眠りについてた僕は、それまで経験したことのない揺れに襲われて目を覚ましました。まだ身体が目覚めきっていないうちに、思わず頭からフンをかぶったのを覚えています。あれからずいぶん年月が経ち、その間日本のあちこちで大きな地震が起こりその爪痕を残していますが、僕は本当に幸いなことに、リアルで恐怖を感じた地震にはあのときしか遭っておりません。それでも京都の揺れはまだ小さくて済み、その直後には火に包まれる神戸の街が生々しく報じられました。被災地のライフライン、心のケア、仮設住宅、ボランティアの活躍といった、いま災害が起こるたびに行われるさまざまな活動には、このときの震災の教訓が多く生かされていると言ってよく、日本人の意識を変えた平成期の大きな転換点となりました。浮かれた学生時代の日々を送っていたその頃の僕にとっても、1つの節目となった出来事であったように思います。

ここ数日、日本各地で比較的大きな地震が発生しています。ふだん当たり前のように享受している日常はいつ脅かされるかわからない、その意識は欠かせません。いま人生の岐路に立って勝負の日々を送っている人達も、「生きる」ということを改めて意識する節目となるときです。周囲に震災を経験された方がいれば、ぜひ話を聞いてみてください。



共通テストの当日は大雪が心配という年も珍しくないんですが、明日の京都の予想最高気温は16℃、暖かい日になりそうです。受験生が全力を出し切れることを願います。

当面の教室予定

1/16(金)
16:00~22:00

1/17(土)
16:00~22:00

1/18(日)
16:00~21:00

1/19(月)~1/21(水)
16:00~22:00

1/22(木)~1/23(金)
★早朝学習会あります★
7:00~8:10

16:00~22:00

※21時以降、教室に生徒が残っていない場合には閉室させていただきます。

※天候や各種感染症の状況等により、変更させて頂く場合があります。

阪神・淡路大震災とは何だったのか

——私たちの社会を大きく変えた 1995 年 1 月 17 日——

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、兵庫県南部を中心に非常に大きな地震が発生しました。これが「阪神・淡路大震災」です。震源は淡路島北部、地震の規模を示すマグニチュードは 7.3。神戸市などでは震度 7 という、当時としては観測史上最大級の揺れが記録されました。

この地震による被害は甚大でした。亡くなった人は 6,400 人以上、負傷者は 4 万人を超えます。家屋の被害は約 25 万棟にのぼり、多くの人が一瞬にして住む場所を失いました。高速道路が横倒しになり、鉄道は寸断され、港湾施設も大きな被害を受けました。テレビに映し出された、火災で赤く染まる神戸の街の映像は、日本中に強烈な衝撃を与えました。



当時の日本では、「地震は地方で起こるもの」「都市は比較的安全」という意識が少なからずありました。しかし、阪神・淡路大震災は、大都市の直下で地震が起きたとき、どれほど深刻な被害が出るのかを突きつけました。家屋の倒壊による圧死や、家具の転倒による被害が多かったことも、生活の中に潜む危険を改めて考えさせる結果となりました。

この震災が社会に与えた影響は、被害の大きさだけにとどまりません。まず大きかったのは、「ボランティア元年」と呼ばれるほど、多くの市民が自発的に被災地へ支援に入ったことです。学生や会社員、主婦など、専門家ではない普通の人々が、炊き出しや物資運搬、話し相手といった形で被災者を支えました。これをきっかけに、日本ではボランティア活動が社会に広く根づいていきます。

また、国や自治体の災害対応の遅れも大きな課題として浮き彫りになりました。情報の共有不足、救助の遅れ、避難所での生活環境の悪さなど、反省点は数多くありました。その教訓は、その後の防災計画や法律、耐震基準の強化、緊急地震速報の整備などに活かされています。いま私たちが学校や地域で行っている防災訓練の多くは、この震災の経験を土台として作られています。



さらに重要なのは、人々の「日常」への意識の変化です。昨日まで当たり前だった生活が、一瞬で失われる現実を、多くの人々が初めて実感しました。「生きていること」「支え合うこと」「備えること」の意味が、社会全体で問い直されたのです。

阪神・淡路大震災は、教科書の中の出来事ではありません。今も被災を経験した人たちが、私たちの身近にいます。もし機会があれば、そのとき何を感じ、どう生きてきたのか、話を聞いてみてください。それは、これからの人生を生きるうえで、きっと大切なヒントになるはずです。

(写真提供：神戸市 記事：ChatGPT を用いて作成)